

書評

ヒロ・ヒライ、小澤実 編

『知のミクロコスモス——中世・ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー』

(中央公論新社、二〇一四年)

鶴岡 賀雄

一冊の書物としても、とても丁寧に造られた本である。カバーから表紙、いわゆる帯まで、各ページのレイアウト、使われるフォント、紙の品質や色調まで、細かな配慮が行き届いていることが伝わってくる。「はじめに」(二人の編者による)に記された、「本書の構成と成立の背景」に名が挙げられ、「日本におけるインテレクチュアル・ヒストリー研究の影の功労者」とまで称えられている高名な編者、故二宮隆洋氏への敬意の表れであり具体化でもあるのだろうと推察される。造本のことだけではない。編者たちは、論文集のかたちをとる本書の編集に当たっては、提出稿に「徹底的に朱を入れる」という方針で臨んだという。そして「本書において表記等に間違いがあれば、それはひ

とえに編者らの責任である。」とまで明記している。書評者もいわゆる論集形式の本の編者となったことは何度かあるが、これほど誠実な関わりをしたことはなかった。見習うべき態度と思ひ密かな感銘を受けたが、これは編者たちの、書物への愛の現れであるとともに、一冊の本として実現する学問——学問一般であるが、より狭くは「インテレクチュアル・ヒストリー」——への愛と情熱の表現でもあると思われた。

では、そのインテレクチュアル・ヒストリー(II)とは何か? 「はじめに」の前半は、それを闡明する一種のマニフェストのように書かれている。IIは、いわゆる思想史・哲学史と、一九世紀以来政治・制度・行政の記述が中心となってきた歴史学との狭間ないし交差点に自らを位置づける。二〇世紀の歴史学は、政治史偏重への反省から、文化史、精神史、社会史、心性史、といった領域に、その都度研究と記述の方法を開拓しつつ拡張してきたけれども、なお「個人の業績、個別の作品」についての研究は扱いかねている。一方思想史・哲学史は、いわゆる知の巨人たちの業績を扱うけれども、哲学、神学、科学、芸術、文学といった、近代的意味での学や知や活動の枠組みを前提として、そうした枠組みから見て有意義な側面に関心を集中させて研究してきた。つまり偉人たちが多様な業績を生み出してきた

歴史的文脈——社会・経済・政治的文脈のみならず、彼女らが生きていたそれぞれの時代・地域におけるいわゆる「知のコスモス」——への配慮が十分ではなかった。Ⅱは、この従来の研究方法では見えていなかった部分に目をこらそうとする。とすれば、Ⅱはあらゆる時代、地域に関してなされるべき研究だろうが、本書は大きくいって「中世やルネサンス期」が対象とされる。それは、編者たちの専門領域の事情もあるのだろうが、「中世やルネサンス期」が、このⅡという研究視点がとりわけ有意義な時代だからでもあるろう。上記のような近代の知の枠組みが確立する以前のこの時代にあつては、いわゆる思想史・哲学史の主流の記述からは漏れ落ちている人々、ないし側面が豊かに残されておき、その研究は、定式化された思想史理解、精神史理解の偏差を明るみに出しつつ、歴史理解の厚みを増すのに資する、ひいては、「従来型の歴史記述に変更をせまる」ものとなる可能性がとくに大きい。本書の研究は、従前の歴史記述、思想史叙述の大枠を前提とした上でそうした研究の隙間を埋める「ニッチ」研究、落ち穂拾いの研究として、あるいは西洋「裏思想史」への好事家的興味のもとに読まれてはならない。

では、Ⅱの「醍醐味を紹介するショークース」と謳われている本書の具体的中身はどうなっているか。駆け足で

覗いてみる。

四部に分かれたる本書の第Ⅰ部は「学問の伝統と革新」と題されて、西欧中世（一三〜一四世紀）の教会説教の形式や文体についての研究（赤江雄一「語的一致と葛藤する説教理論家——中世後期の説教における聖書の引用」、いわゆる記憶術の、ルネサンス期（一六世紀）における特徴ある一形態であるランベルト・シェンケルの『記憶術の宝庫』の研究（桑木野幸司「記憶術と叡智の家——ルネサンスの黄昏における伝統の変容」）、同じくルネサンス期に、スカンディナヴィア、つまりスウェーデンやデンマークで、「もうひとつの古代復興」という文脈のなかで「ルーン学」が誕生する経緯を解明した論文（小澤実「ゴート・ルネサンスとルーン学の成立——デンマークの事例」）、の三篇が並ぶ。近年の西洋中世史研究で、大量の説教資料が体系的に研究されつつあることは評者も仄聞していたが、その内容については赤江氏の論文で初めて一端に触れた。「ルネサンスの記憶術」については、比較的知られたテーマとして見聞きしていたが、シェンケルという人の名は初めて知った。ルーン文字については近現代の「オカルト」的文脈での使われ方しか知らず、学問的研究史については全く無知だった。つまり、評者の知らないことばかりで、従って各論文について立ち入った紹介すらできないのは遺憾だ

が、知的関心を掻き立てられつつ、こうした研究が拓いていくであろうさまざまな問題領域について思い巡らすだけで十分に豊かな読後感が得られる。

第Ⅱ部「神と自然、そして怪物」に並ぶのは次の四論文である。ルネサンス期にキリストのプロフィール（横から見た顔）がほぼ一定の相貌のもとに流行し、それが本当の顔として受容され流布し変奏されていく経緯をたどるもの（水野千依「キリストのプロフィール肖像——構築される『真正性』と『古代性』」、一五世紀末にドイツで刊行された『年代記』に多数掲載された「怪物」——一つ目人、犬頭人、無頭人、両性具有、一足人、無鼻人、巨大耳人、山羊人、馬足人、小型人、六腕人、多毛人、六指人、半馬人、四つ目人、鶴首人、等々の異形の「架空種族」——の挿絵イメージの源流や影響史、またそうした空想力の意義を探るもの（菊地原洋平「ルネサンスにおける架空種族と怪物——ハルトマン・シェーデルの『年代記』から——」、宗教改革の教義上の大論争点となった聖体を巡る神学議論についての、ラブレレーやロンサルといった文人たちの言説を紹介するもの（平野隆文「キリストの血と肉をめぐる表象の位相——ラブレレーからド・ベーズまでの文学と神学の交差点——」、スピノザの周辺にあって、デカルトないしスピノザの哲学・神学を何らか受け入れ、何らか拒否しつ

つ、「近代」の思想潮流の中で新たな神学を構築しようとしたネーデルラントの神学者たちの試みを探り、その意義を解明しようとするもの（加藤喜之「スキヤンダラスな神の概念——スピノザ哲学とネーデルラントの神学者たち——」）。

第Ⅲ部「生命と物質」は、以下の三編からなる。一六世紀前半に活動した医師、人文主義者スカリゲルのアリストテレス主義的生命論を論ずるもの（坂本邦暢「アリストテレスを救え——十六世紀のスコラ学とスカリゲルの改革——」、フェルネル、シェキウス、ゼンネルトという、一六〜一七世紀の医師・医学者（広義には哲学者）たちが、ガレノスの原典に新たに触れることで展開した（今の言葉で言えば医学・生理学的）霊魂論＝人間霊魂発生論を紹介、検討するもの（ヒロ・ヒライ「霊魂はどこからくるのか？——西欧ルネサンス期における医学論争——」、ベイコンの生命論の独自な、あるいは知られざる相貌を、未完の草稿「死の道について」に探るもの（柴田和宏「フランシス・ベイコンの初期手稿にみる生と死の概念」）。

最後の第Ⅳ部「西洋と日本——キリシタンの世紀」には、一六世紀のイエズス会やドミニコ会の神学書に説かれていた霊魂論が、いわゆるキリシタン版諸書の中でどのように日本語で語り直されているかを精査して、同時代の西欧に

おける様々な思潮の反映と変質を見て取る論考（折井善果「アニメ」（靈魂）論の日本到着——キリシタン時代という触媒のなかへ——）」と、同じくキリシタン文献における宇宙論を、「パライン」の位置の空間的表象に着目して抽出するもの（平岡隆二「イエズス会とキリシタンにおける天国（パライン）の場所」）の二編が収められる。

以上、目次を並べたかたちで本書の内容、というよりも扱われている対象を——ショーケースの中身を——見渡したわけだが、評者としての第一印象は、ひたすら *curiositas* を掻き立てられる、といったものだった。第一部の紹介に付して記したように、扱われている人物や題材さえほとんど知らないものばかりで、己れの知見の狭さゆえではあるにせよ、まずは知識の増大を純粹に喜ぶことができる。その上で、それらが一冊の書物に収められて壮麗に並べられるとき、そこにはある効果が生まれるだろう。諸論考の多様多彩を通じて浮き上がってくる何か共通なものに思いを致すよう、読者は誘われていくにちがいない。その誘いに乗って、本書冒頭の「田宣言」へのひとつの反応として、「田の魅力と可能性についての思いの一端を述べて「書評」に代えたい。

たしかに、この種の、思想史の主流を形成するビッグネー

ムとはならなかった人々（ベイコンは大哲学者だが『死の道について』は主著からは遠い）の仕事に目を向けることで、思想史の記述を、単一のメインストリームを辿る線的な物語ではなく、歴史のリアリティにより近づく言わば面的な、あるいは三次元的な「厚み」を持ったものに近づけることができる。そしてそれによって、これまで引かれたことのなかった思想史の線が、新しい見方として浮き上がってくることもあるだろう。思想史・哲学史の主要人物（例えばライプニッツ）の思想理解に新たな光が当てられ、解釈の更新がなされることもありうるだろう。要するに、思想史の風景、見方・見え方の変容、変貌を、編者らと共に期待しうるし、予感もされる。

しかしそれだけだろうか。本書に示されたような「田——インテレクチュアル・ヒストリー」という呼称で言われるものの内実は必ずしも一様ではないと思われるが——研究を通覧することから喚起される思念のひとつは、そもそも「田は何を記述しようとしているのか、との問いであるように思う。つまり、「田の視線がその焦点を合わせているのは、過去の「偉大な個人の思想」ではなく、その広狭や深淺は区々であるにせよ、或る時代・地域にある程度共通して広まり、人々の思考を意識的・無意識的に支配しあるいは刺激していた観念、観念群、観念系、

といったものようである。この意味では、IIの狙う水準は、しばしば言われるように、ラヴジョイ派の「観念史 history of ideas」が記述の対象としようとすると単位観念 unit-ideas のそれに近いのかもしれないが、その輪郭はもつと個別的であり、明確だろう。ドーキンスのいわゆる「ミーム」——あらゆる思考の単位、といちおう捉えておく——よりは複雑で豊饒だが、歴史を通じて長く存続する idea-units ではなく、それぞれの時代・地域で一定程度存続し、変容し、消滅していった（愛すべき）観念連関たち、これが、IIが記述しようとする歴史の主人公、主体たちのようである。それは、したがって、それぞれの時代・地域のより大きな世界像である（初期）フーコーの言う「エピソード」の中でこそ、つまり知と権力の配置・コンステレーションの中でこそ意味をもち命を保つ。であれば、この特異・特定の観念群に丁寧な眼をこらすことで、そうした観念が生きていられた時代・地域の世界観ないしエピソード——「知のミクロコスモス」——の真相もまた見えてくることになるだろう。また逆に、今日の視点からは奇妙・異様に見えるかもしれない（古生物のような）観念たちの生命を、それに相応しく理解するには、それらが棲息しえていた知のミクロコスモス全体にまで検討の範囲を拡げていく必要もあるのだろう。知のミクロコスモスを

凝視することで、ミクロコスモスがそこに見透かされるのであり、逆にミクロコスモスはミクロコスモスが見えてきて初めてその正体・真義を明かす。この普遍的関係はIIにおいて典型的に当てはまるだろう。

IIがその記述と理解を目指す観念たちは、しかし、それらがその中でこそ生きていられた知のコスモス自体の變化に対応できずに、古生物のように消滅・絶滅していった。つまり、生き残った——環境変化に「適応」した——観念たちによって紡がれる歴史記述、思想史叙述の主流ないし定型からは、取り落とされ、忘れられていく。それでもそうした過去の観念系は、絶滅した生物も何らかその遺伝子を残すように、陰に陽に後代への影響を及ぼし、観念系としては変貌し変身してその縁戚ないし後継観念を発生させることもあるだろう。忘れられていた資料・史料の新たな読み直しによって、埋もれていた縁戚関係を浮き立たせて、現代からする過去の見方・見え方としての歴史を変えていくこと、この、歴史研究の醍醐味であり歴史研究者の野望でもあるう営みを、本書に収められた諸論文は、それぞれの持ち場から、試みているように思われる。本書の言うIIは、そうした歴史家・思想家の欲望にもつとも相応しい研究対象・研究スタイルであるように思われる。——こうしたことが、本書の絢爛かつときに奇怪でもある華

やぐ知識のショーケースを眺め巡りながら、curiositasの
水準をこえて沸き立ってきた悦ばしい想念の一端である。

(東京大学大学院人文社会系研究科教授)